

坊部紅顏嘆琵琶、上陽白髮向窻紗、長門花泣萬行淚、流作温湯波浪花、

洗目湯 善治眼疾云

湯在温湯谷之側其形如妬湯昔伊弉諾神行筑紫橘之小戸以潮滌眼夫潮水由地中行故闕地而何處不有水哉然則以此洗眼湯謂之橘小戸之支流亦何害焉夫眼有數種焉有肉眼有凡眼有法眼有道眼有天眼有仙眼有佛眼夫見而不見不見而見者佛眼也仙眼也見三千刹界如見掌上菴摩果者天眼也道眼也觀心見性者法眼也視而不知者凡眼也一翳作障者肉眼也今此湯洗何眼目耶一洗了淨裸裸又洗了明歷歷金篦刮膜要開汝眼試豁開看奈何若在我儒言之則仰觀俯察者伏羲之眼也達四目者有虞氏之眼也不見是圖者夏后氏之眼也望道而未見者文王之眼也視觀察者孔子之眼也非禮勿視者顏子之眼也十目所視者曾子之眼也視其眸子者孟子之眼也聖賢之眼目洗之以何哉不以湯也況外藥乎然則如何哉唯還吾宜以讀書一隻眼、

誰道三年曾患眼、由洗滌涌湯功細流不擇一涓滴、明月清風銀海中、

〔夫木和歌抄二十六〕文治六年五社百首有間湯

皇太后宮大夫俊成卿

ありま山雲間もみえぬ五月雨にいで湯のするも水まさりけり

題不知

よみびととらす

あひ思ふ人をおもはぬやまひをばなにかありまのゆへも行べき

永久四年百首出湯

源兼昌

わたつうみははるけき物をいかにしてありまの山にまほゆいづらん

〔後拾遺和歌集三〕四月ばかり有馬の湯より歸り侍りて、郭公をなんき、つると人のいひをこせ

て侍ければ、

大中臣能宣朝臣

聞き捨て、君がきにけむ鶺鴒尋ねに我は山路こえみむ